

## 母親を介護施設に入居させた男の話

二組 八番 大高弥生 十五番 沢口裕太 二十四番 高山真穂

都心から電車で三十分ほどの閑静なところに私は住んでいる。小高い丘の上の分譲地で、遙か西の方角に丹沢山系の山並みを眺めることができた。広い庭ではなかったが、休日などにはテラスに出て、丹沢山系でもとりわけ美しい稜線の鍋割山を眺めながらコーヒーを飲むだけで心が晴れ晴れとするのだった。

もともとここは叔母の家で、幼い頃に私の両親が相次いで死んだので、哀れに思ったのだろう、ちょうど子どもがいなかったこともあって、私は叔母夫婦に引き取られ、家族の一員としてこの家に住むようになったのだ。叔母は私を本当の子どものようにたいせつに育ててくれた。近所の友だちの誰もが叔母夫婦の实の子ともだと疑わなかったほど、叔母は私を可愛がってくれた。

私が大学を出た年の暮れに叔父は亡くなり、その五年後の春、私は同じ職場の女性と結婚することになった。叔母は「亭主はもういないし、母屋は私ひとりに広すぎるよ。ちょうどこの家には離れもあるし」と言って、叔母は私の勉強部屋として増築した離れに移り、母屋を私たち若夫婦に譲ってくれたのだった。

それから十年が経った。元気だった叔母もさすがに年老いて、食事や身支度は自分でこなすことができていたが、衰えは見た目にはっきりしていた。すると、妻は叔母が離れにいるのをよいことに、本性を露わにして、声高に語りかけてくるようになった。

「あたしはね、やりたいことがたくさんあるから、叔母さんの世話はごめん被りますよ」

「元気なうちに介護つきマンションに移ってもらいましょよ。叔母さんなら、そのくらいの蓄えはきつとあるはずよ」

「実はね、前々から考えていたんだけど、私はあの離れをリフォームして料理教室を開きたいのよ」

などと、私が仕事から帰るたびに言ってくるようになった。

そして今夜は唐突に介護つきマンションのチラシを持ってきて、「ここなら叔

母さんが好きなガーデンングもできるし、話し相手になる同世代の入居者もたくさんいるから、今よりもずっと楽しく過ごせるはずよ」などと言い、「とにかく今週末の土曜日に見学に行くと予約をしてみましたから、頼みますよ」などと、私の予定も確かめずに話を進めていたのだった。

私は結婚を機に妻には仕事を辞めてもらっていたので断り切れなかった。とにかく話を先延ばしすればよいのだと自分に言い聞かせて、「とりあえず、叔母に話だけはしてみるけど、私としては叔母の気持ちを優先させてあげたいんだ」と妻に伝えた。

月の美しい晩であった。夕食の後、私は叔母をテラスに誘い、紅茶を飲みながら介護付きマンションの話の切り出してみた。「丹沢の麓の町に大手不動産会社が経営する介護つきマンションがあつてね、医者や看護師が常駐していても安心だし、叔母さんが大好きなガーデンングもできるそうだよ。叔母さんはだいぶ身体が弱ってきたようだし、私たちに気兼ねすることもないから、考えてみたらと思つてさ。もちろん、叔母さんの気持ちが最優先だからね」と、口早に言った。

するとどうだろう、「その話ならね、私も入居してもいいかなと考えたよ。週末に見に行くことになっているんだろ」と叔母は答えたのだ。いぶかしく思った私に向かって、さらに叔母は付け加えた。「実はね、テーブルにチラシが置いてあつたんだよ。これ見よがしにね。真由美さんだね、そんなことをするのは。見学の日時までメモしてあつたし、辰ちゃんが望んでいるなら仕方ないよね」と淋しげにつぶやいた。私は「車で三十分もあればいける町だよ。時々はちゃんと顔を出すから」と言うのが精一杯だった。

その土曜日になった。朝起きると、妻は「どうも熱っぽいから、今日はあなたと叔母さんだけで見学に行ってくださいね」と、毛布で顔を覆いながら言った。正直、私はかえって好都合だと思つたが、もちろんそんなことは口にせず、「しっかり話を聞いてくるから大丈夫だよ。それより熱が下がるといいね」とだけ言った。

介護付きマンションは予想以上にいいところだった。叔母も同じように感じ

ているようだった。対応がとても丁寧で、施設内を案内されたが、見学者向けのわざとらしさもまったく感じられなかった。見学を終え、私からのいくつかの質問に答えたあと、担当者は「こうした施設は見た目だけで決めるわけにはいきません。合う、合わないが大事なので、私どもではご入居を希望される方には一週間の体験入居をお願いしております。いかがなさいますか」と言われた。すると、今度は叔母が「早速ですが、来週からでも大丈夫ですか」と言っていて、自分から申込用紙を記入し始めるのだった。

叔母の体験入居から三日が経った。夕食のあと私はテラスに出て、介護付きマンションがある方角をぼんやり眺めていた。急に風が立って、雲の間から明るい月が顔を出した。ふいにおかし高校で習った物語の一節が思い浮かんだ。そして、自嘲気味に、

わが心慰めかねつ丹沢や鍋割山に照る月を見て  
と詠んでみた。

心は決まった。翌朝、私は会社を休み、叔母を迎えに行った。平日なので高速道路はすいていて、後部座席の叔母は「辰ちゃん、大丈夫なのかい、真由美さんは」と何度も尋ねてくる。その度に私は「心配はいらないさ」と答える。なぜなら、昨夜のやりとりで、私には妻はもう家にはいないことが確かだと思われたから。

(終わり)